

「評論家入門」

小谷野敦著

昔なら「作家」つまり「小説家」を目指した若者たちが、評論、エッセー、ルポルタージュ、ノンフィクションの仕事を目指すケースが増えているという。この著はそれを受け、「評論」とはいったい何かを単刀直入に述べ、生み出す喜びと苦しみを告白している。そもそも評論と論文は違う。著者は「閃きの評論、地を這う論文」と断言する。両者が時として混同されるのは、日本人が「意見」と「事実」の区別が苦手ゆえ起こるであろう。評論は「事実」を重ね実証する論文とは違い、あくまで作者の「意見」である。直観を動かす、鮮やかな手際で謎を解き、飛躍した文章で読ませる。だから面白い。小林秀雄はもちろん、梅原猛、吉本隆明らもわかりだ。また柄谷行人著「日本近代文学の起源」の考察には一章を割いている。柄谷は論の導入に前衛でも野心的でもない小説をもつてくる



生みの喜びと苦しみ告白

ときがあり、この「とぼけたワザ」は見習うべきというくたりはうなずける。

後半は評論家でもある著者の体験が切実に語られる。恩師や知人を通じての出版社探し、安い原稿料でようやく出版にこぎつけてもなかなか売れない不安。貧窮する生活と、自著をめぐる批判に対する神経をすり減らす論争のやりとり。精神安定剤や抗うつ剤を飲みながら、それでも書く覚悟がないなら、とてもやっていけない仕事だと忠告する。

そこで勧めるのがエッセイストだ。小説は元来、尋常でない事件や人を描くものだが、その形式が時代とともに頭打ちになってきた。それに反してエッセーは、生活とともに題材が豊富に生まれる。しかも日本の文学的土壌に「随筆」として長く地位を保ってきた歴史があり、今後発展の余地ありと予見するのだ。だが、それも大変な道程に違はなく、重要なことは、自費出版でない、あくまで商業出版を目指す書き続けることだと説く。

「有名評論」のランクづけもついでいて、AからEの評価がされている。これまで目にした書がどの位置にあるか、ぜひこの本を手にとって楽しんでいただきたい。

評・宮本誠一（小規模作業所「夢屋」代表）

平凡社新書・798円

◇こやの・あつし 1962年茨城県生まれ。国際日本文化研究センター客員助教授、東京大学非常勤講師。